

読谷村における読谷山花織の変遷

渋谷 咲希

1. はじめに

沖縄フィールドワークの研究テーマを考える際、現在の自分と関連付けて対象を決めたいと思った。私の出身は山形県の旧朝日村という田舎の村であり、さらにその中でも田麦俣部落と呼ばれる自然に囲まれた過疎化の進んだ僻地が私の故郷であった。しかしそこには多くの伝統、また文化が存在している。その1つが伝統芸能である。5～15歳位までの女子はみんなこの伝統芸能を踊らなければならず、祭りなどで振袖を着て年に2～3回披露される。この時に私は振袖という衣服に憧れの念を抱いた。特別な衣服をまとうことで特別な気持ちになる、その気持ちを現在も忘れずにいたことが、今回「読谷山花織」を研究対象にすることに決めた理由のひとつである。

また私自身が農村出身であったことから、「読谷村」にも大きな関心を抱いた。農村から生まれた文化には何か特徴があるのだろうか。本研究では、「村」から生まれたひとつの伝統工芸品である「読谷山花織」の誕生、発展、衰退の流れを、実際に訪れ見てきた「読谷村」と共に見ていきたい。

2. 先行研究について

読谷山花織の個別的な研究はなされていない。読谷山花織の歴史、復興者の読谷山花織に対する思いなどが綴られているパンフレットや資料は存在する。一方で、読谷村の村づくりについての研究は複数存在する。明治学院大学国際平和研究所では活発に読谷村を舞台とした研究が行われている。

明治学院大学国際平和研究所の吉原功氏は、「読谷村の平和創造—地位力としての文化・芸能」（2001）、「沖縄読谷村、焦土から平和・文化の村へ」（2003）という一連の論文を発表している。吉原（2003）では、焼き物＝陶器と同じように、伝統織物「花織＝はなうい」の復活再生が村ぐるみの取り組みであること、また、米軍基地返還の問題と関連させて読谷村における「文化」の重要性を強調している。さらに、読谷村の「本土化＝近代化」の問題についても言及し、読谷村の持つ「自己表現力」が「本土化」によって衰退するのではないかという懸念も指摘している。

また、明治学院大学国際平和研究所が発行した『PRIME』第16号（2003）には、「平和と自治の地域づくりを考える—沖縄県読谷村を例に一」という題名で行われたシンポジウムの報告が掲載されている。その中で、池原栄順氏は、「読谷村の基地と村づくり」と題し、1974年の山内徳信村長の選出が読谷村の「文化村」としての村づくりに繋がったと言えると述べている。

読谷村の米軍基地と文化と芸能が入り混じった複雑な環境が、研究対象として興味深いものになっているのであろう。

3．読谷山花織とは

読谷山花織（写真1）は、正式には「ユンタンザハナウイ」と呼ばれる沖縄染織のひとつで、読谷村内に存在する3つの工房で織られている。村民以外が織ることが禁じられており、ひとつひとつ織り機を使って織るため大変手間のかかる織物である。木綿生地がほとんどで、藍、福木、車輪梅などの草木染色した青、黄、緑、茶、白の糸で紺地に織り出される模様が一般的である。模様は^{ジンダマ}銭玉、^{オオジバナ}扇花、^{カジマヤ}風車を基本にして小さな点で構成される。星の数々にも似た、繊細な花柄が特徴である。

現在は多様な地の色に、様々な模様が織り込まれている。主に着物の着尺地や、現代では土産品としての需要が高い。読谷山花織事業協同組合の管理下であり、県指定無形文化財、通商産業大臣指定伝統工芸品に指定され全国に広く知られるようになった。



写真1
読谷山花織の模様

4．調査

2006年9月20～22日

主な調査場所

- ・読谷村役場
- ・読谷村立歴史民族資料館
- ・座喜味城跡
- ・読谷山花織事業組合
- ・波平工房
- ・むら咲むら
- ・残波岬
- ・長浜部落

4.1 読谷村について

読谷村は那覇市からバスで1時間弱北に行ったところにあり、村の東側は東シナ海に面している（図1）。人口3万8千人余り（2004年4月）の日本の中で2番目に人口の多い村である。

村内に米軍施設が5施設所在している。合計1,567haの軍用地が存在し、村面積の45%を占めている。読谷村は観光地としても有名で、修学旅行生も多く訪れている。村の西側は美しい海岸が続き、リゾート地としてホテルや教会も立てられている。現地調査時にも偶然結婚式を行う風景を見ることができた。図2が読谷村の地図であるが、私が訪れた場所と、実際に自分の足で歩いた大まかなルートを黒の実線で示した。

調査3日目に西側の海沿いの道を1日かけて歩いた。読谷村を空間的に把握するため、また琉球王朝時代に大貿易港として栄えた長浜の現状を、この目で確認したかったからである。むら咲むら近くの県道から長浜まで、相当な距離であった。しかし、海とさとうきび畑に囲まれた読谷の道を歩くことで様々な美しい風景に触れることができたし、リゾート地、観光地としての読谷村の姿も発見することができた。また、海から少し離ればそこは坂だらけの沖縄らしい道が続いていた。そして、村内に5箇所存在する米軍基地の様子も興味深かった。本土の人間の意識では、「沖縄＝米軍基地」というイメージが少なからずあるのではないだろうか。私もその意識があり、公然と米軍基地が建っていることに正直違和感はなかった。しかし村内には「基地返還祝賀会」などの横断幕なども掲げられ、読谷村一丸となって基地返還の運動を起こしてきたことがよく分かった。写真2～9で私が訪れたところを紹介する。地図と照らし合わせて見て欲しい。



写真2 米軍施設トリステーションの入り口

日本に馴染むために鳥居をモチーフとした門を建てたのだろうか。



写真3 米軍施設トリステーション

看板も赤瓦で沖縄らしい。読谷の村に公然とトリステーションは存在した。



写真4

村中央の役場までの道はかつての米軍の飛行滑走路を利用してあるため、道幅がとても広い。歩道と車道を区分するものがない。両側はさとうきび畑であった。



写真5 座喜味城跡

大きな城跡である。座喜味城は村内でも一番高いところに位置しており、ここから周りを十分に見渡せるようになっていたのだろう。



写真6 残波岬近くに聳え立つ

巨大なシーサーの像

昭和59年に立てられたそうだ。かつての貿易国である中国を見つめていると言われている。



写真7

残波岬の灯台に登れば村側を一
望できる。



写真8

岬から長浜までの道沿いには花
が植えられていた。読谷山花織の
繊細な花の模様を連想させた。



写真9

長浜。岬の影響なのか海上には
波もなく、今は養殖が行われてい
るようであった。大貿易港の面影
は見受けられなかった。

4.2 読谷山花織の歴史

4.2.1 起源

読谷山花織の起源、発祥を知り得る具体的資料は見つかっていない。しかし 1372 年琉球王国が成立し、時を同じくし中国との交易が始まった。その交易が始まったのが読谷の長浜港であったとされている。このことが琉球王国と中国の歴史を作る発端となり、これ以降、琉球は大交易時代を開き黄金時代を迎えることとなる。同時に東南アジア諸国との南蛮交易も盛んになった（図3）。

長浜の港から南洋方面へ貿易のために行き来していた村人達が、土産に持ち帰ったビルマやインド、ブータンの花織が、読谷山花織りの元となったと言われており、実物を見ても、読谷山花織と東南アジアの織物がよく似ていることがわかる。（写真 10～12）この東南アジアの織物を元に読谷の地で独自に織られるようになったのが読谷山花織の始まりである。



図3

（那覇市の玉陵にて撮影）

琉球王府が、中国、朝鮮半島、東南アジア諸国と交易を行っていたことが分かる。



写真 10 読谷山花織



写真 11 インドネシアの織物



写真 12 ブータンの織物

4.2.2 発展

読谷山花織は、14世紀以降読谷の人々の日用品として、家庭の女性が家族のために織っていた。防寒具としての着物（ワタジン）や、手ぬぐい（ティサージ）、祭り衣装（ウッチャキ）が主に織られていた（写真13～15）。

また、後には琉球王府の保護のもと、御用布として王府の士族と、読谷の人々以外の着用が禁じられていた。



写真 13 ワタジン



写真 14 ティサージ



写真 15 ウッチャキ

4.2.3 衰退

はじめの花織の衰退のきっかけとなるのが、1609年の薩摩藩島津氏の侵攻である。このとき、沖縄で織られていた他の織物は薩摩藩に貢納品として納められていた。しかし読谷山花織は貢納品に指定されることはなかった。読谷村からはさとうきびが貢納品として指定されることになり、厳しい統治下にあったため、花織をこれまでのように織る十分な余裕はなかったのではないかと考えられる。この薩摩藩の侵攻により、花織は少しずつ衰退し始めることになる。

明治に入ると、琉球処分による廃藩置県で琉球王国は崩壊し、沖縄県となった。沖縄の文化と独自性は後進的なものとして一切否定され、中央志向が強まり、本土のものの方が上とみなされるようになった。また、琉球王府の士族が着用するために織られていた読谷山花織は、琉球王国が実質なくなることで、王府からの保護もなくなった。そして琉球処分以降、本土からもたらされる大量生産の布の方が沖縄の染織品よりも珍しがられ、ありがたがられた日々の中で、従来使用されてきた読谷山花織は衰えることになった。

そして更に大きな衰退のきっかけとなるのが、沖縄が戦場となった第二次世界大戦である。読谷村にも米軍が上陸した。その際に読谷村民は南北へと逃げたそうだ。その際に花織を持って逃げていったという話を、読谷山花織事業協同組合理事長の新垣さんにお聞きした。戦争の前から衰退していたとはいえ、まだ家庭に残されていた花織も織り機も、この戦争によりほとんどが燃えてしまった。この戦争で、花織りは「幻の花織」になってしまったのである。

村立歴史民俗資料館で、戦後、復興以前わずかに残されていたと思われる花織を着ての家族写真、祭り衣装としての花織の貴重な写真を見ることができた。



写真 16 花織を来ての家族写真



写真 17 花織を着て舞踊を演じる様子

4.2.4 復興

戦後、昭和 30 年代から読谷山花織は復活の努力を始めることとなる。当時の読谷村長であった池村村長は「幻の花織」を復活させることを試みる。当時の議会からは「高度経済成長の中で、人間の手でコツコツ織ったものにお金をかける必要があるの

か」「それより道路を作ったり農業の予算を増やしたりしたほうがいい」と反対された。しかし池村村長は諦めず、後に人間国宝に認定される與那嶺さんに読谷山花織の復活を懇願することになる。與那嶺さんは首里の女子工芸学校を卒業し、織物に携わっていた。家庭で読谷山花織を見たことはあっても織ったことはなく、また工芸品として認識されていなかった読谷山花織であったが、1964年昭和39年に「幻の花織」は復活したのである。

4.2.5 現在

1975年の沖縄海洋博をきっかけとして、観光地としての沖縄が脚光を浴びるようになった。平成の時代になり沖縄ブームも到来し、本土から沖縄に観光にやってくる人が増えることとなる。琉球処分の際に強まった、沖縄の後進的イメージが振り払われ、沖縄のものが見直されることになった。そこで、読谷山花織もお土産品として注目されるようになった。元来織られていた着物、手ぬぐいに加え、商品としての帯、コースターやネクタイ、テーブルセンターなども作るようになったのだそうだ。インターネットによる通信販売も行われている。

また、読谷山花織の体験を通じて実際に花織に触れることができるようになった。工房の方々に薦められ、実際に体験ができる場所に行き体験させていただいたのだが、本来織られている読谷山花織とは多少異なるものであった。

今現在、読谷村内には花織工房が3つ存在する。織り手は現在160人ほどいらっしゃるということだ。そのひとつの波平工房に伺うことができた。(写真18、19) 織り手一人ひとりに織り機があり、朝から夕方まで、休憩中はお喋りしながら毎日読谷山花織を織っていらっしゃるそうだ。「織るのは楽しいよ。」と皆さん口を揃えておっしゃっていた。読谷村では女性の仕事として織り手の存在が確立されているのであろう。



写真18 波平工房の様子



写真19 織っている方の様子

これは調査を終えてからのことであるが、2006年12月2日の『琉球新報』に、読谷山花織に関するショッキングな記事が記載されていた。読谷山花織の商品の需要が減っているというのだ。全国的に言える着物離れにより、これまで花織の着尺、帯の8割近くを仕入れていた問屋が仕入れ量を大幅に減らした。これによって一時生産が

休止されることになったようだ。今後も伝統工芸品として発展、継承されていくためには、新しい需要を見つけていくことも必要だと思われる。関係者は、「産地の特徴を出したのを作ることも大事なので、この機会に作り手に勉強してほしい」とおっしゃっていた。

4.3 ティサージの持つ力

読谷山花織が衰退する以前に織られていたティサージに関わって、興味深い風習があったことをお聞きしたのでそのことについても調査を行った。

「ウミナイ・ティサージ」（祈りの手巾）と呼ばれるものは、旅に出る兄弟や、愛する人への無事安全を願って、女性が織っていた。「ウムイヌ・ティサージ」（想いの手巾）と呼ばれるものは、自分の意中の人のために想いを込めて女性が織っていた。また、このティサージは着尺地を織る際にあえて長めに織り、最後に余った部分をティサージとして贈っていたとも言われている。このように、織物は女性の仕事とされており、その女性は家族を守る力があると考えられ、願掛けにこのティサージを利用していたと思われる。この読谷の風習は読谷山花織りが衰退するまで続いていたとされている。

また、村立歴史民俗資料館の長浜館長から、「三分の一のティサージ」というティサージにまつわるお話もお聞きすることができた（写真20）。この作品は1906年（明治39年）大湾近八の家で子守の仕事をしていた松田マカーが、近八がハワイへ移民する際に織って渡したものである。その後様々な経緯でこのティサージは三分の一ずつに切断されながらも受け継がれ、読谷山花織復興の大きく役立ったとされている。



写真 20 三分の一のティサージ
左側が切れている

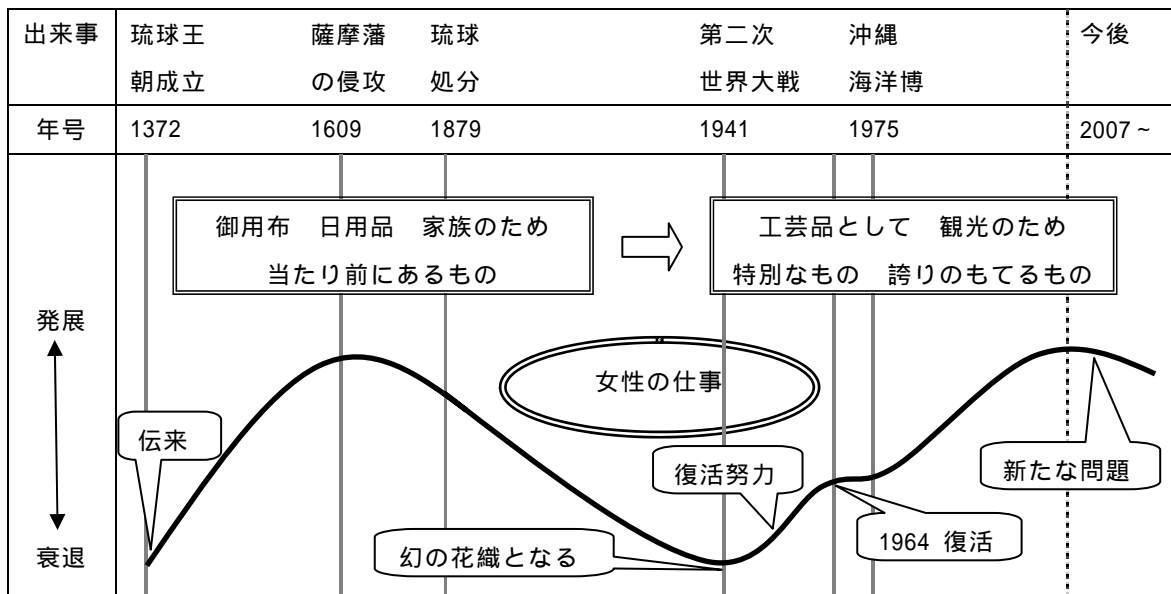
またこの話からティサージというものは何らかの女性の力、家族を守る力があることが伺えた。100年もの年月が経ってもこのように残され、大切にされるティサージは、当時の人々にとって本当に大切な心の拠り所となっていたのではないかと感じる。

今現在は「ウミナイ・ティサージ」、「ウムイヌ・ティサージ」のような風習は残されていないとお聞きしたのだが、花織体験に訪れた際、観光で訪れた恋人同士がお互いのために花織を織って贈りあうという元来の風習を真似た、観光客による新たな伝統の継承の仕方が出てきているという事実を知ることができた。お土産品としても意中に人に読谷山花織の品物を買って帰るといった観光客もいるようだ。

5. 分析・考察

ここまで、読谷村について、読谷山花織の歴史、またティサージについて報告してきたわけだが、ここで読谷山花織の発展、衰退、復興をグラフによりイメージ化し、歴史的事実と共に独自に年表としてまとめた（表1）。

表1 読谷山花織年表



読谷山花織は伝来した後、琉球王府の保護のもとで発展している。村内では家庭に各家庭に当たり前にある物として使用されていた。しかしその後薩摩藩の侵攻、琉球処分により沖縄は本土化され、読谷山花織は衰退していく。そして沖縄が戦場となる第二次世界大戦によって読谷山花織は最大の衰退期に陥る。だが戦後まもなくして読谷山花織を蘇らせようとする動きが起こる。今度は工芸品として村の活性化のために役立てようと、文化のひとつとしての読谷山花織が復活するのである。ここで初めて「読谷山花織」という名前がつけられたのである。人間によって創造された文化である。

このように、読谷山花織は600年以上もの歴史の中で様々な時代の変化を乗り越えてきたことになる。そしてその中で注目したいのが花織の質的变化である。形は変わらずとも需要、用途など、読谷村における花織の果たす役割が変化している。衰退以前は「当たり前にあるもの」として家庭にあったものが、現代は「特別なもの」、「誇りのもてるもの」として捉えられている。

しかしそのような変化の中で変わらないことが、花織を織ることが絶えず「女性の仕事」として捉えられていたことである。そしてその「女性の仕事」という概念は全く差別的な意味を含まない。そのことはかつての風習であったティサージに宿る女性の力からもよく分かる。女性には家庭を守る力があるとされ、昔から敬われてきたのであろう。

現在読谷村は人口も増え、観光地としての地位も確立しており、多くの観光客、修学旅行生が訪れる活気溢れる村に発展した。私も実際3日間読谷村に訪れ、そのような印象を受けた。そこで着目したい点が、米軍、戦争との関わりである。読谷山花織、またこれは読谷村にも置き換えることができるのだが、それらは第二次世界大戦時に戦争の舞台となったことで酷く傷つけられた。人々も痛手を負った。しかし、再び立ち上がるまで長い時間はかからなかった。村が戦争を経験し、戦争によって傷ついた

からこそ、村は文化村として再び奮起しようと試みた。皮肉にも、戦争という暗い存在が、読谷山花織の復興、読谷村の発展の背景にあるのではないかと考える。

以上のように読谷山花織は、様々な歴史的事象に影響を受けながら、現在の形に至った。今後どのように発展していくのだろうか。着物としての需要の減少、吉原（2003）の指摘する読谷村の本土化、近代化による影響などの新たな問題も浮上している。しかし、これまでの様々な試練を乗り越えてきた読谷山花織は今後も発展していくのではないだろうかを期待している。

6. おわりに

私は今回の調査で初めて沖縄に行ったのだが、沖縄は力と優しさに満ちた場所だなあという印象を受けた。読谷村も同様に、活気の溢れる村であり、一方で優しさも持ち合わせた村であるという印象であった。また、文化の村であり、観光も出来、美しい自然もあり、そして一方で対称的な米軍基地が未だに存在しているという、まさに「ちゃんぷるー」という言葉がぴったりの場所である気がする。

読谷村が発展してきた背景にはやはり「女性の力」が影響しているのではないかという気がしてならない。私が冒頭に述べた着物を着ると特別な気持ちになるということは、「女性の力」と関係があり、女性ならではの感情なのではないだろうか。このような「女性の力」を尊重することが、ひとりひとりの人間を敬うことに繋がり、読谷村はそのような意識を反映させながら村づくりを行ってきたのではないかと思う。今後も読谷村、読谷山花織が発展していくことを心から願っている。

今回初めてフィールドワークを体験し、戸惑うこと、大変なことも多くあったが、現地に行って現地の人々と触れ合うことで気付くことが多かった。まだまだ勉強不足であるが、今は達成感に満たされている。以後も今回のフィールドワークの経験を活かして自分が納得いくまで調査したり分析したりしたい。

最後に、この調査に協力し、歓迎して下さった読谷村の方々に、深く感謝を申し上げます。

参考文献

- アドビーンズ（編）（2006）『にっぽんの旅 20 沖縄 宮古・石垣・西表島』昭文社
- 渡久山朝章（2004）『読谷山風土記』金城印刷
- 明治学院大学国際平和研究所（2003）「特集：平和と自治の地域づくりを考える—沖縄県読谷村を例に—」『PRIME』第16号（<http://www.meijigakuin.ac.jp/~prime/syuppanprimeframe1.htm>）
- 山内徳信（1998）『叫び訴え続ける基地沖縄 読谷 24年—村民ぐるみの闘い』那覇出版社
- 吉原 功（2003）「沖縄読谷村、焦土から平和・文化の村へ」『PRIME』第17号 明治学院大学国際平和研究所（<http://www.meijigakuin.ac.jp/~prime/syuppanprimeframe1.htm>）

参考ウェブサイト

- 「琉球新報」<http://ryukyushimpo.jp/>
- 「沖縄の地図」<http://www.mapfan.com/kankou/47/jmap.html>